左: ユベール・ド・ジバンシィの 1955 年春夏オートクチュールコレクション。©André Ostier/Association des Amis d'André Ostier　右: クチュリエ、オートクチュールのコーナー。photo：Mariko Omura

しかし、アンドレ・オスティエならではの写真といったら、戦後のパリをグラマラスに彩ったカフェ・ソサエティたちの写真だろう。彼らが主に 1950 年代に催した贅を尽くした仮装舞踏会の雰囲気をいまも知ることができるのは、彼が写真に残してくれたおかげである。フランスのモード誌で「パリ・ライフ」という連載企画の写真を担当していた彼は、生まれ持っての優美さで社交界の人々の集まりにやすやすと溶け込めていたのだ。たとえば 1951 年にヴェネツィアで大富豪のシャルル・ド・ベイステギが世界中から貴族、ミリオネアなど 1500 名を自宅のパラッツォ・ラビアに集め、後世に残る話題の舞踏会を開催した際に、セシル・ビートン、ロベール・ドアノーとともに会場入りを許された数少ないカメラマンのひとりがオスティエだった。招待された社交界の女性たちはクリスチャン・ディオールやクリストバル・バレンシアガたちのクチュールドレスで出席。会場にはその時の写真も展示されているが、その一方、1949 年にボーモン邸で催された「王と王

妃の舞踏会」に動物のかぶりものをしたクリスチャン・ディオールの写真も見ることができる。オートクチュールとその顧客たちがゴージャスに賑やかにパリを輝かせていた時代の貴重な雰囲気を写し残したオスティエ。この機会に彼の仕事を発見してみよう。

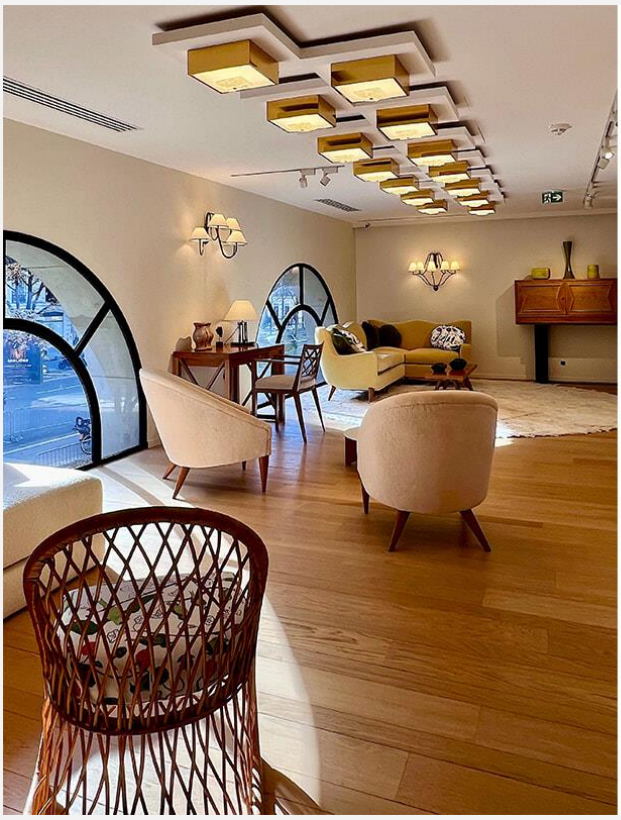
1951 年、シャルル・ド・ベイステギが開催した舞踏会。ヴェネツィアの運河沿いの宮殿にゲストを乗せたゴンドラが次々と。仮面をつけていないのはブラック・エンジェルに扮したアーティストのレオノール・フィニだ。©André Ostier/Association des Amis d'André Ostier

左: 1949 年にエティエンヌ・ド・ボーモンが開催した「王と王妃の舞踏会」に、友人のクリスチャン・ディオールは動物の王様の扮装で出席。　右: 1957 年、サンルイ島のランベール邸で開催された「ヘッド・ボール」でのイヴ・サンローラン。photos：Mariko Omura

アレクシ・ドゥ・レデ男爵。1951 年のパラッツォ・ラビアでの舞踏会にて。©André Ostier/Association des Amis d'André Ostier

会場では有名人に限らず、舞踏会でオスティエの目を捉えた個性的な仮装の男女の写真も。photo ：Mariko Omura

madame FIGARO・jp



写真展の後は 2 階に上がって、ギャラリー所蔵の 20 世紀の家具も鑑賞。photos：Mariko Omura

『André Ostier Intime』展

Galerie Jacques Lacoste
19, avenue de Matignon
75008 Paris

開）11:00〜13:00、14:00〜19:00

休）日

www.jacqueslacoste.com
@jacqueslacoste